

琉球大学学術リポジトリ

更新世における琉球列島の陸生へビ類相－豊富な椎骨化石の同定結果とその意義

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム 公開日: 2008-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 忠広, 大塚, 裕之, 太田, 英利 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/4967 |

PS-34 更新世における琉球列島の陸生ヘビ類相-豊富な椎骨化石の同定結果と
その意義

(The Pleistocene terrestrial snake fauna of the Ryukyu Archipelago: Implications
from taxonomic identification of abundant vertebral fossils)

池田忠広^{1,4}・大塚裕之²・太田英利³

1 琉球大学理工学研究科, 2 鹿児島大学理学部, 3 琉球大学熱帯生物圏研究センター, 4
現在の所属: 兵庫県立人と自然の博物館

沖縄島をはじめとする琉球列島の各島々の上部更新統裂化充填や洞穴堆積物からは、ヘビ類の椎骨化石が多数産出している。またごく限られてはいるが、下部更新統の浅海堆積物からもヘビ類の椎骨化石が得られている。これらの化石は過去における、各地域でのヘビ類の生息状況に関する直接的な証拠であり、琉球列島や周辺地域の陸生動物相の起源、あるいは分布の拡大や分断分化、適応進化、絶滅などを通じた多様性の変動過程を推定するうえで、きわめて重要な情報源とみなすことができる。このような利点を生かすためにはこれらヘビ類化石の分類学的置位を高い精度で推定することが必要であるが、残念ながらこのような研究の進捗は依然、きわめて不十分である。そこで本研究ではまず、先に私自身が明らかにした東アジア産を中心とした現生の6科27属46種8亜種の椎骨形態に関する情報に、新たに調べた3科12属14種分の情報を加え、それらを総合することでヘビ類の椎骨のもつ同定に有用な形質を整理・拡充した。次にこの成果を適用しつつ、上述のヘビ類椎骨化石それぞれの分類学的置位を検討した。その結果、沖縄島産の下部更新統ヘビ類椎骨化石は、*Cyclophiops* sp.、*Dinodon* sp. (Colubridae)、*Protobothrops* sp. (Viperidae)など3科4属に同定された。この結果は現在、沖縄島やその周辺地域に生息する上記の属が、前期更新世までにこの地域で定着していたことを示す。ただしこのうち*Dinodon* sp.に特定された椎骨化石は同属の現生種(アカマタ)のそれとは明らかに異なる点があり、同じ属とはいえ現生種とは異なる系統が当時生息しており、その後、おそらく絶滅したことが考えられる。また、いくつかの島々(徳之島、沖縄島、宮古島、石垣島、与那国島)の上部更新統産ヘビ類椎骨化石については、*Protobothrops* cf. *elegans*、*Sinomicrurus* sp. (Elapidae)、*Elaphe* sp. (Colubridae)など3科4属が同定された。これまでの同定結果を見る限り、宮古島を除く島々の後期更新世のヘビ類相には、現在のそれと明らかに異なる要素はほとんど認められない。対照的に宮古島からはクサリヘビ科(*Protobothrops*など)をはじめ、同島に現生するヘビ類とは明らかに異なる分類群の化石が多数確認できた。これらの化石の存在は宮古島において、後期更新世から現在に至るまでのわずかな間に、多くのヘビ類が絶滅していったことを示している。なお後期更新世のヘビ類椎骨化石の多くは、現生のそれぞれ対応する分類群の椎骨に比べて大きく、したがってこの時代に各島に生息していたヘビ類が全体的に現生種に比べて体サイズが大きかったことがわかる。このことは当時、現在よりもこのエリアに餌となる動物が豊富に生息しており、かつ全体的に大型であったことを示唆している。